

原著論文

アシロ目魚類の2稀種, オオソコイタチウオとクロヨロイタチウオの
再記載Redescription of Two Rare Ophidiiform Fishes, *Cataetyx platyrhynchus* Machida,
1984 and *Hoplobrotula badia* Machida, 1990, from Japan三井翔太¹⁾・瀬能 宏²⁾Shota MITSUI¹⁾ & Hiroshi SENOU²⁾

Abstract. Two rare ophidiiform fishes, *Cataetyx platyrhynchus* Machida, 1984 (Bythitidae) and *Hoplobrotula badia* Machida, 1990 (Ophidiidae), are redescribed on the basis of single specimens collected at depths of 800 m in the eastern part of Sagami Bay and 600 m in the adjacent waters of the Ryukyu Islands respectively. The occurrence of *C. platyrhynchus* in Sagami Bay represents the second locality record for the species, which is previously known only from the original description of the female holotype from the Okinawa Trough. It is the first male specimen described, and bears a thick and short genital appendage with a hooked intromittent organ. The specimen differs from the holotype in the following diagnostic characters: higher dorsal- and anal-fin ray counts (88 vs 84 and 66 vs 57); and longer snout length (24.8% vs 20.8% of HL). The specimen of *H. badia* generally agrees with the original description except for some proportional measurements such as eye diameter (12.1% vs 19.9% of HL), pectoral-fin length (58.8% vs 71.8% of HL), and pelvic-fin length (70.4% vs 78.5% of HL), etc. These differences in both species are recognized here as intraspecific variation. It is suggested that the distribution of both species extends from the Pacific coast of Honshu to the Okinawa Trough, and, for *H. badia*, further to the South China Sea.

Key words: Ophidiiformes, *Cataetyx platyrhynchus*, *Hoplobrotula badia*, Sagami Bay, Ryukyu Islands, redescription

¹⁾ 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科
〒108-8477 東京都港区江南 4-5-7
Graduate School of Marine Science and Technology,
Tokyo University of Marine Science and Technology
4-5-7 Konan, Minato, Tokyo, 108-8477, Japan
shomitsui@gmail.com

²⁾ 神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History
499 Iryuda, Odawara, 250-0031 Japan
senou@nh.kanagawa-museum.jp

アシロ目フサイタチウオ科オオソコイタチウオ属
Cataetyx Günther, 1877 (Ophidiiformes, Bythitidae)
は、世界で12種が知られており (Nielsen *et al.*,
1999; Balushkin & Prokofiev, 2005)、日本近海から
はオオソコイタチウオ *C. platyrhynchus* Machida,
1984 のみが知られる (中坊・甲斐, 2013b)。また、
同じアシロ目のアシロ科ヨロイタチウオ属
Hoplobrotula Gill, 1863 (Ophidiiformes, Ophidiidae)
は、世界で3種が知られており (Machida, 1990;
Nielsen *et al.*, 1999)、日本近海にはクロヨロイ
タチウオ *H. badia* Machida, 1990 とヨロイタチ

ウオ *H. armata* (Temminck & Schlegel, 1846) の 2 種が分布している (中坊・甲斐, 2013a)。オオソコイタチウオは, Machida (1984) によって琉球列島近海の沖縄舟状海盆から得られた 1 個体に基づいて記載されて以来、再捕記録がなかった。また、クロヨロイタチウオは, Machida (1990) が原記載を行った相模湾からの記録のほか、Guan *et al.* (2010) により南シナ海から報告されているだけの稀種である。

今回、著者の一人である三井は相模湾で採捕されたオオソコイタチウオの標本を入手することができた。また、神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されていた琉球列島近海産ヨロイタチウオ属の標本を精査したところ、クロヨロイタチウオに同定された。これらはいずれも日本近海からの 2 例目の採集記録となるものである。精査の結果、これらの標本は識別形質を含む計数・計測形質およびその他の形態的特徴について、新たな知見をもたらすものであることが判明した。特に、オオソコイタチウオの雄個体についての知見はこれまでに無く、雄交尾器の存在やその形状を記載することは、本種の繁殖生態を考察する上で重要である。また今回の採捕記録は、両種の分布域が従来知られていたよりも広範囲に及ぶ事を示唆するものであった。そこで本研究では、両種の形態について再記載を行うとともに、オオソコイタチウオの繁殖生態、そして両種の分

布様式についても考察を行った。

材料と方法

体各部の名称および計数・計測項目は岡村・北島 (1984) に従い、鰓耙の計数については Cohen & Nielsen (1978) に従った。脊椎骨数、鰓条骨数、各鰭の鰭条数の計数およびクロヨロイタチウオの吻棘の観察は軟 X 線写真を撮影して行った。オオソコイタチウオの肛門における体高は交尾器の基部における体高を計測した。色彩の記載は鮮時に撮影したデジタルカラー写真に基づいて行い、色の表記は財団法人日本色彩研究所監修 (1993) の系統色名に準拠した。本研究に用いた標本はいずれも神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類資料 (KPM-NI) として保管されている。また、鮮時のカラー写真は同博物館の魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録されている。

オオソコイタチウオ

Cataetyx platyrhynchus Machida, 1984

(Figs. 1A & 2A, B)

Cataetyx platyrhynchus Machida, 1984: 263, figs. 183, A-C (type locality: Okinawa Trough, Japan).

標 本

KPM-NI 31499、710.5 mm SL、雄、神奈川県



Fig. 1. A: *Cataetyx platyrhynchus*, KPM-NI 31499, 710.5 mm SL, off Nagai, Yokosuka, Kanagawa, Japan, photo (KPM-NR 106992A) by H. Senou; B: *Hoplobrotula badia*, KPM-NI 24974, 665.8 mm SL, off Ryukyu Islands, Okinawa, Japan, photo (KPM-NR 48285) by H. Senou.

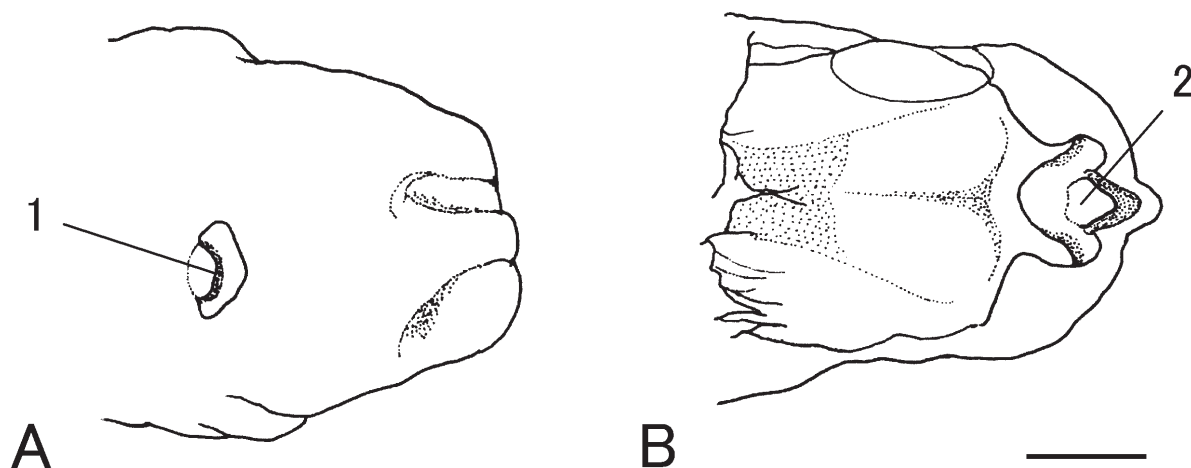


Fig. 2. Genital appendages of *Cataetyx platyrhynchus*, KPM-NI 31499. A: anterior view; B: posterior view. 1: anus; 2: intromittent organ. Scale bar = 10 mm. Drawn by S. Mitsui.

横須賀市長井地先、相模湾東部、水深約 800 m、深海カニ籠漁（横須賀市佐島の鮮魚店で購入）、2012 年 11 月 1 日採集。

画像

KPM-NR 106992A, B: KPM-NI 31499 の鮮時のカラー写真、瀬能 宏撮影 (Fig. 1 A)。

記載

本標本の各部の計数・計測値は Table 1 に示した。

体は延長し、軀幹部はやや側扁する。尾部は強く側扁し、先端は細長く伸びない。頭部は吻長の 4.0 倍。頭頂部は平坦で両眼間隔域が僅かに窪む。吻は先端が鈍く、強く縦扁する。口は大きく、主上顎骨の後端は眼の後端を越え、眼より後方の長さは眼径とほぼ同長。両顎は同長で、互いに先端は突出しない。主上顎骨の上縁は眼下の肉質部 (fleshy suborbital fringe) に僅かに被われる。主上顎骨の後端は拡張し、その高さは眼径より僅かに小さい。眼は長楕円形で、頭部背面に位置する。両眼間隔幅は狭く、眼径の 1.5 倍。前鼻孔は短い管状で、吻端付近の上唇直上にある。後鼻孔は半円形で、眼の直前にあり、吻部背面に開口する。鰓孔は大きく、左右の鰓条膜は眼の中央下で合する。主鰓蓋骨に強い 1 棘があり、その先端は鰓膜後端に僅かに達しない。前鰓蓋骨には棘が無い。擬鰓骨に棘がある。

交尾器 (Fig. 2) は太く短く、長さは眼径の約 1.5 倍。臀鰭始部のすぐ前方に位置しており、腹部に沿って折り畳むことができる。前側面の先端部は正中線に沿って隆起し、先端で乳頭状に突出する。intromittent organ は鉤状で、交尾器後側面の、開口部よりも先端に位置する。後側面中部は膨隆し、中央部には左右 1 対の膨隆部が存在する。肛門は交尾器前面の中央付近に存在する。

歯は前上顎骨、歯骨、鋤骨、口蓋骨および基鰓骨にあり、小さな顆粒状の歯が絨毛状歯帯を形成する。前上顎骨と歯骨の内側の歯は外側の歯よりも大きく長い。鋤骨の歯帯は V 字型。基鰓骨の歯帯は、基鰓骨の側面、第 3・第 4 下鰓骨の間に 1 対の小歯帯として存在する。上咽頭歯は無い。舌は長く幅広い。第 1 鰓弓には 3 本の細長い鰓耙がある。鰓耙の先端は瘤状で、全体に小棘が発達する。擬鰓は 2 本で短い糸状。

体は小円鱗で被われる。後鼻孔および頬部より前方の吻部、主上顎骨の後背部、前鰓蓋骨後縁、鰓膜は無鱗。上唇および下唇は微小な円鱗で被われる。交尾器は無鱗で、基部のみ円鱗で被われる。鰓条膜および峡部から喉部にかけてはほぼ無鱗で、少数の小円鱗が散在する。胸鰭基部および背鰭と臀鰭の基底は小円鱗で被われる。側線は体の中間付近で中断し 2 本となるが、前後の側線は互いに重ならない。

背鰭と臀鰭は基底が長く、尾鰭と連続する。背鰭始部は胸鰭後端の直上。臀鰭始部は体の中央よりやや後方。腹鰭は 1 軟条、腹鰭始部は前鰓蓋骨後縁と主鰓蓋骨後縁のほぼ中間に位置し、左右の基底が接近する。胸鰭は円く、基部の高さは吻長よりやや短い。尾鰭長は腹鰭長よりやや長い。

鮮時、体は一様に黒に近い暗い灰みのブラウン。交尾器は前面から側面と先端部が黒に近い暗い灰みのブラウン。後面と intromittent organ、および内面は乳白色。肛門はクリーム色。背鰭、臀鰭および尾鰭は基底側は黒に近い暗い灰みのブラウンで、縁辺側はやや淡く、灰みのブラウンになる。腹鰭および胸鰭は黒に近い暗い灰みのブラウン。

分 布

沖縄舟状海盆 (Machida, 1984; 中坊・甲斐, 2013b) および相模湾 (本研究) に分布する。

備 考

本標本は、Machida (1984) による原記載と概ね一致した。本種は、本属の中では大型種のグループ (成魚は 765 mm に達する; 小型種は 250 mm まで) に分類され、体が褐色で吻が強く縦扁する、両顎の歯が顆粒状である (ただし本種の下顎内側の歯はやや伸長する)、脊椎骨数が 56–63 である、頭長は吻長の 4.2–5 倍であるなどの特徴から、同属他種と識別される (Machida, 1984; Nielsen *et al.*, 1999; Balushkin & Prokofiev, 2005)。 *Cataetys simus* Garman, 1899, *C. laticeps* Koefoed, 1927 および *C. niki* Cohen, 1981 は、体が暗褐色である、吻が強く縦扁する、両顎の歯が顆粒状であることなどで本種と類似するが、これらは背鰭および臀鰭の鰭

条数が多いこと (それぞれ 93–107、69–83) により識別できる (Machida, 1984; Nielsen *et al.*, 1999)。本標本の背鰭と臀鰭の鰭条数は、それぞれ 88、66 であり、Machida (1984) の原記載および Nielsen *et al.* (1999) が示した値 (それぞれ 84、57) より多く、また吻長に対する頭長の割合 (4.0 倍) は Nielsen *et al.* (1999) が示した値 (4.2–5 倍) よりも小さい。しかし、*C. simus*、*C. laticeps* および *C. niki* よりも鰭条数が少なく、吻長に対する頭長の割合がこれら 3 種に比べて小さい (上記 3 種では頭長は吻長の 3 倍) ことから、これらの相違は種内変異とみなし、本標本はオオソコイタチウオに同定されると判断した。

以上のことから、本種の識別的特徴は背鰭と臀鰭の鰭条数がそれぞれ 84–88、57–66、吻長に対して頭長は 4.0–5 倍とするのが妥当である。本標本は、先述の背鰭と臀鰭の鰭条数や吻長のほか、左胸鰭の鰭条数 (27)、側線上方横列鱗数 (ca. 24) および脊椎骨数が多い (19 + 42 = 61)、

Table 1. Measurements and counts of *Cataetys platyrhynchus*.

	Present study KPM-NI 31499	Machida (1984) Holotype
SL (mm)	710.5	570
TL (mm)	774.0	—
Measurements (% in SL)		
Maximum body depth	20.0	17.9
Body depth at anus	13.6	14.3
Body width	11.7	13.9
Head length	26.8	27.0
Predorsal length	40.8	37.0
Preanal length	60.0	58.8
Prepelvic length	21.5	21.7
Measurements (% in HL)		
Head depth	42.2	52.6
Head depth at anterior margin of eye	29.6	27.8
Head width	48.0	66.7
Horizontal eye diameter	11.6	13.0
Interorbital width	16.9	16.9
Upper jaw length	49.6	43.8
Maxillary depth	11.2	14.3
Snout length	24.8	20.8
Pectoral-fin length	46.1	47.6
Depth of pectoral peduncle	17.3	20.4
Pelvic-fin length	28.2	35.7
Caudal-fin length	31.3	35.7
Counts		
Dorsal-fin rays	88	84
Anal-fin rays	66	57
Pectoral-fin rays	27/26	26/26
Pelvic-fin ray	1	1
Caudal-fin rays	10	10
Longitudinal scale rows	ca. 217	ca. 230
Scales above lateral line	ca. 24	ca. 23
Branchiostegal rays	9	9
Developed rakers on 1st gill arch	3	3
Pseudobranchial filaments	2	2
Vertebrae	19+42=61	18+39=57

縦列鱗数が少ない (ca. 217)、頭高、頭幅、腹鰭長が小さい (それぞれ頭長の 42.2 %、48.0 %、28.2 %)、主上顎骨後端の高さは眼径より僅かに小さい、尾鰭長は腹鰭長よりやや長いなどの点において Machida (1984) が示したホロタイプの記載と異なる。その理由としては、個体差、成長によるもの (本標本はホロタイプよりも標準体長が 20 cm ほど大きい)、あるいは雌雄差 (Machida, 1984 のホロタイプは雌個体) や地理的変異 (ホロタイプは沖縄舟状海盆産) などが考えられる。しかし、いずれによるものであるかを判断するには、追加標本を検討する必要がある。

本種の雄の交尾器の形態的特徴は本研究で初めて記載された。Garman (1899) は、*C. simus* の交尾器の形態について図を伴った詳細な記載をしており、形状や肛門の開口位置などがオオソコイタチウオの交尾器と類似している。一方、Cohen (1981) は *C. niki* の雄のパラタイプ 1 個体について、intromittent organ は幅が広く二葉に分かれていると記している。Cohen (1981) には intromittent organ の図が載せられていないため詳細は不明だが、同属内でも種によって intromittent organ の形状が異なっている可能性がある。

フサイタチウオ科魚類は、繁殖の際に交尾器を用いた体内受精を行う胎生魚類であることが知られている (Nielsen *et al.*, 1999)。Follesa *et al.* (2011) は、オオソコイタチウオ属魚類である *C. allenii* (Byrne, 1906) において体内受精が行われている事を確認した。本研究により、本種の雄個体にも交尾器が存在することが確認されたことから、本種も同科の同属他種と同様に体内受精を行う胎生魚類であると推測される。

クロヨロイタチウオ

Hoplobrotula badia Machida, 1990

(Fig. 1B)

Hoplobrotula badia Machida, 1990: 209, figs. 1-3 (type locality: Sagami Bay, Japan); Guan *et al.*, 2010: 939, figs. 3 & 4 (South China Sea, China).

標 本

KPM-NI 24974、665.8 mm SL、琉球列島近海、水深 600 m、深海ザメ漁、2009 年 (採集日不詳)。

画 像

KPM-NR 48285: KPM-NI 24974 の鮮時のカラー写真、瀬能 宏撮影 (Fig. 1B)。

記 載

本標本の各部の計数・計測値は Table 2 に示した。体は延長し、軀幹部はやや側扁する。尾部は強

く側扁する。吻端は上唇より突出しない。吻棘は短く先端が鈍い。口は大きく、上顎後端は眼の後縁を越える。主上顎骨後端は幅広く、後端部の高さは眼径より大きい。眼は円形。前鼻孔は小さく円形で、周縁は肉質の稜に囲まれる。前鼻孔の直上に感覚孔が無い。後鼻孔は前鼻孔より大きく、眼の直前に位置する。両眼間隔域は広く、弱く窪む。頂部は平坦。主鰓蓋骨にやや下方を向く 1 棘があり、その先端は鰓膜の後縁に達する。前鰓蓋骨の隅角部には 3 本の棘がある。

歯は顆粒状で、前上顎骨、歯骨、鋤骨、口蓋骨および基鰓骨に存在し、絨毛状歯帯を形成する。鋤骨の歯帯は幅の広い U 字型。基鰓骨には正中線上に細長い楕円形の歯帯 1 塊と、その後方に菱形の左右 1 対の歯帯が存在する。擬鰓には 13 本の短い鰓弁がある。

背鰭と臀鰭は基底が長く、尾鰭と連続する。背鰭始部は腋部のやや後方。臀鰭始部は体の中央よりやや前方。腹鰭は 2 軟条。第 2 軟条が第 1 軟条より長く、その先端は頭部後縁に達する。腹鰭始部は眼の直下に位置し、左右の基底が互いに接近する。胸鰭は楕円形で、先端は背鰭始部と臀鰭始部のちょうど中間に達する。

体は円鱗で被われる。頭部背面と眼より前方の頭部側面、主上顎骨、上唇と下唇、頭部腹面、前鰓蓋骨後縁および鰓膜は無鱗。胸鰭基部は小円鱗で被われる。背鰭および臀鰭基部は鱗に被われない。

鮮時、体は一様に濃い赤みのブラウンで、背部と尾部腹縁付近は暗い灰みのブラウン。背鰭、臀鰭および尾鰭は全体的に暗い灰みのブラウンだが、尾鰭と尾鰭付近の背・臀鰭は黒に近く、背・臀鰭の後部を除く縁辺付近はやや淡い。胸鰭は基部が赤みのブラウンで、後方ほど淡くなる。腹鰭は全体的に白く、基部付近は明るい灰みのブラウン。

分 布

本種は相模湾 (Machida, 1990; 中坊・甲斐, 2013a)、琉球列島近海 (本研究)、南シナ海 (Guan *et al.*, 2010) に分布する。

備 考

本標本の計数・計測値および形態的特徴は、Machida (1990) による本種の原記載と概ね一致した。本種は吻棘を有すること、背鰭鰭条数が 95 未満であること、腹椎骨数が 13 であることで *Hoplobrotula gnathopus* (Regan, 1921) と、吻棘が短く先端が鈍いこと、前鼻孔直上に感覚管の開口がないこと、背鰭鰭条数が 94 であること、腹鰭後端が頭部後縁を越えることでヨロイタチウオと区別できる (Machida, 1990; Nielsen *et al.*, 1999)。本標本は背鰭鰭条数が 92 である、腹鰭後端は頭部後縁に達するがそれを越えないと

Table 2. Measurements and counts of *Hoplobrotula badia*.

	Present study	Machida (1990)	Guan <i>et al.</i> (2010)
	KPM-NI 24974	Holotype	n = 6
SL (mm)	621.5	558	231–335
TL (mm)	665.8	—	—
Measurements (%SL)			
Maximum body depth	23.3	23.8	18.2–20.9*
Body depth at anus	22.2	19.2	—
Body width	14.0	11.7	—
Head length	24.7	23.4	22.1–23.4*
Predorsal length	30.5	29.8	26.8–28.1*
Preal length	45.7	44.1	—
Measurements (%HL)			
Snout length	26.8	21.0	20.0–24.3*
Eye diameter	12.1	19.9	20.0–24.3*
Interorbital width	24.5	21.5	23.6–27.5*
Upper jaw length	53.7	55.1	—
Lower jaw length	57.4	59.3	—
Pectoral-fin length	58.8	71.8	65.4–76.9*
Pelvic-fin length	70.4	78.5	59.4–67.6*
Postorbital length	60.2	—	53.8–60.9*
Counts			
Dorsal-fin rays	92	94	92–96
Anal-fin rays	76	79	79
Caudal-fin rays	4+5=9	4+5=9	9
Pectoral-fin rays	22/22	22	22–23
Pelvic-fin rays	2	2	2
Scale rows on lateral line	ca. 80	—	72–75
Scale rows above lateral line	10	10	8–9
Scale rows below lateral line	28	27	16–17
Branchiostegal rays	8	8	8
Developed rakers on 1st gill arch	1+4=5	1+4=5	5
Pseudobranchial filaments	13	13	—
Vertebrae	13+41=54	13+40=53	—
Vertebra number below dorsal-fin origin	6th	6th	—
Vertebra number above anal-fin origin	14th	14th	—
Dorsal-fin ray number above anal fin origin	17th	17th	—

*Guan *et al.*'s (2010) published values were used to calculate the percentages presented here.

いう点で、Machida (1990) や Nielsen *et al.* (1999) が挙げた標徴と一致しない。しかし、その差は僅かである一方、他の 2 種では腹鰭後端は頭部後縁に達しないこと、背鰭鰭条数がヨロイタチウオでは 85–90 であり本標本よりもかなり少ない (Machida, 1990; Nielsen *et al.*, 1999) ことから、これらの相違は種内変異とみなし、本標本はクロヨロイタチウオに同定されると判断した。従って、本種の識別的特徴は、背鰭鰭条数が 92–94 である、腹鰭後端が頭部後縁に達するかそれを越えるとするのが妥当であろう。上記の特徴のほかに、本標本では臀鰭鰭条数が少ないこと (76)、尾椎骨数および側線下方横列鱗数が多いこと (それぞれ 48、28)、眼が円形であることや、眼径、腹鰭長、胸鰭長が小さいこと (それぞれ頭長の 12.1 %、58.8 %、70.4 %) で、Machida (1990) の原記載と異なっている。本標本は Machida (1990) が記載に用いたホロタ

イプとほぼ同大であることから、これらは成長によらない種内変異であると考えられる。なお、Guan *et al.* (2010) は南シナ海から本種の小型個体 (231–335 mm SL) を報告しているが、側線下方横列鱗数が 16–17 で Machida (1990) および本研究の記載 (27–28) に比べて著しく少ない。別種の可能性も含めて再検討が必要である。

分布および分布特性

オオソコイタチウオは、これまでに沖縄舟状海盆 (25° 17.1' N, 124° 46.8' E) からの報告のみであった (Machida, 1984)。本研究における相模湾からの記録は、本種の分布域が相模湾から沖縄舟状海盆に及んでおり、従来考えられていたよりも広範囲にわたっている事を示唆している。今回の標本が得られた水深は約 800 m であり、Machida (1984) の報告 (910–990 m) よりも浅いことから、本種が生息する水深帯は 800 m か

ら 990 m に及ぶことが明らかとなった。

クロヨロイイタチウオは、これまでに相模湾および南シナ海から報告されてきた (Machida, 1990; Guan *et al.*, 2010)。本研究による琉球列島からの記録は本種の分布域の空白を埋めるものであり、本種が相模湾から琉球列島、南シナ海にいたる広範な海域に生息している事を示唆している。本標本が得られたのは水深 600 m であり、南シナ海からの記録である水深約 700 m (Guan *et al.*, 2010) よりも浅い。Machida (1990) による報告では採集された水深についての記載は無い。しかし、本種は少なくとも 600 m から 700 m にかけての水深帯に生息している事が明らかとなった。

中坊 (2013) は、日本近海の海産魚類相を分布様式と生物地理要素を用いて区分し、オオソコイタチウオを「沖合温帯大陸斜面下部から深海底魚」の分布 IIb (沖縄舟状海盆) の例として挙げた。しかし、今回の相模湾からの記録を鑑みれば、本種の分布様式は本州太平洋岸も含めた分布 IIa (茨城県から日向灘の太平洋沖と沖縄舟状海盆) に当てはめるのが妥当であると考えられる。また、クロヨロイイタチウオの分布様式については、相模湾、琉球列島および南シナ海での記録があることから、中坊 (2013) の「沖合温帯大陸斜面下部から深海底魚」における分布 III (北海道から九州南岸の太平洋沖、沖縄舟状海盆および南シナ海) に該当すると思われる。今後、本州太平洋側の他の海域において両種が採集される可能性があり、これらの分布様式に関して更なる知見の蓄積が期待される。

謝 辞

本研究を行うにあたり、クロヨロイイタチウオの標本を提供された伊江島ダイビングサービスの湯野川恭氏に感謝の意を表す。また、高橋里恵氏をはじめとする神奈川県立生命の星・地球博物館ボランティアの皆様には、標本の作製および登録作業にご協力いただいた。この場をお借りして、厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Balushkin, A. V. & A. M. Prokofiev, 2005. A new species of the genus *Cataetys* (Ophidiiformes: Bythitidae) from Heracles Banks (the South-Pacific Rise). *Journal of Ichthyology*, 45: 554-558.
- Cohen, D. M., 1981. New and rare ophidiiform fishes from the eastern Atlantic: Canary Islands to the Cape of Good Hope. *Proceedings of Biological Society of Washington*, 94(4): 1085-1103.
- Cohen, D. M. & J. G. Nielsen, 1978. Guide to the identification of genera of the fish order Ophidiiformes with a tentative classification of the order. *NOAA Technical Report NMFS Circular*, (417): 1-72.
- Follesa, C. M., C. Porcu, A. Mulas, S. Salvadori & A. Cau, 2011. Reproductive characteristics of the bathyal viviparous fish *Cataetys allenii* (Osteichthyes: Bythitidae) from the southeastern Sardinian Sea (central-western Mediterranean). *Scientia Marina*, 75(2): 391-397.
- Garman, S., 1899. Reports on an exploration off the west coasts of Mexico, Central and South Africa, and off the Galapagos Islands, in charge of Alexander Agassiz, by the U. S. Fish Commission steamer Albatross, during 1891, lieut. commander Z. L. Tanner, U. S. N., commanding. XXVI. The Fishes. *Memoirs of the Museum of Comparative Zoology*, 24: 1-431, pls. 1-85+A-M.
- Guan, Z.-C., W.-Q. Tang & H.-L. Wu, 2010. Two new record species of the family Ophidiidae from China (Ophidiidae) with a key to subfamilies, genera and species. *Acta Zootaxonomica Sinica*, 35(4): 939-943. (In Chinese)
- Machida, Y., 1984. *Cataetys platyrhynchus* Machida, sp. nov. In Okamura, O. & T. Kitajima (eds.), Fishes of the Okinawa Trough and adjacent waters. Vol. I. pp. 262-265. Japan Fisheries Resource Conservation Association, Tokyo.
- Machida, Y., 1990. A new ophidiid species, *Hoplobrotula badia*, from Sagami Bay, central Japan. *Japanese Journal of Ichthyology*, 37(3): 209-214.
- 中坊徹次, 2013. 東アジアにおける魚類の生物地理学. 中坊徹次編, 日本産魚類検索: 全種の同定, 第三版, pp. 2289-2338. 東海大学出版会, 秦野.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃, 2013a. アシロ科. 中坊徹次編, 日本産魚類検索: 全種の同定, 第三版, pp. 514-524, 1877-1880. 東海大学出版会, 秦野.
- 中坊徹次・甲斐嘉晃, 2013b. フサイタチウオ科. 中坊徹次編, 日本産魚類検索: 全種の同定, 第三版, pp. 529-532, 1881-1883. 東海大学出版会, 秦野.
- Nielsen, J. G., D. M. Cohen, D. F. Markle & C. R. Robins, 1999. FAO species catalogue Volume 18. Ophidiiform fishes of the world (order Ophidiiformes): an annotated and illustrated catalogue of pearlfishes, cusk-eels, brotulas and other ophidiiform fishes known to date. xi+178pp. FAO, Rome. (as FAO Fisheries Synopsis No. 125, Volume 18)
- 岡村 収・北島忠弘, 1984. 沖縄舟状海盆及び周辺海域の魚類 I. 414pp. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 財団法人日本色彩研究所監修, 1993. 改訂版色名小事典. 134pp. 日本色研事業株式会社, 東京.

摘 要

三井翔太・瀬能 宏, 2015. アシロ目魚類の 2 稀種, オオソコイタチウオとクロヨロイタチウオの再記載. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (44): 71-78. [Shota Mitsui & Hiroshi Senou, 2015. Redescription of Two Rare Ophidiiform Fishes, *Cataetyx platyrhynchus* Machida, 1984 and *Hoplobrotula badia* Machida, 1990, from Japan. *Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.)*, (44): 71-78.]

日本近海から得られたアシロ目魚類の 2 稀種について、それぞれ 1 標本に基づく再記載を行った。オオソコイタチウオ *Cataetyx platyrhynchus* Machida, 1984 (フサイタチウオ科: オオソコイタチウオ属) は相模湾東部の水深 800 m、クロヨロイタチウオ *Hoplobrotula badia* Machida, 1990 (イタチウオ科: ヨロイイタチウオ属) は琉球列島近海の水深 600 m から採集された。オオソコイタチウオの相模湾における出現は本種の 2 番目の記録である。また、得られた標本は鉤状の *intromittent organ* を備える太く短い交尾器を持ち、雌 1 標本で新種記載された本種の初めての雄標本である。両種の標本は、概ね各々の原記載に一致したが、オオソコイタチウオでは標徴とされる背鰭と臀鰭の鰭条数が多く (D 88 vs 84; A 66 vs 57)、頭長に対する吻長が長かった (24.8 % vs 20.8 %)。また、クロヨロイタチウオの場合は、眼径、腹鰭長、胸鰭長といった比率に比較的大きな差が見られた。しかしながら、本研究ではそれらの程度や同属他種との比較から、認められた相違はすべて種内変異とみなした。本研究により、両種の分布域は本州太平洋側から沖縄舟状海盆に及ぶこと、クロヨロイイタチウオにおいてはさらに南シナ海に及ぶことが示唆された。

(受付 2014 年 10 月 27 日 ; 受理 2014 年 11 月 28 日)